

浄土

monthly
JÔDO

December 2000

12



法然上人鑽仰会

21世紀もしゃべったる。

OK!

市外も、国際も、
インターネットも、
携帯も、
日本テレコム。



●お問い合わせはお客様センターへどうぞ (☎) **0088-82** (無料) (受付時間) 9:00~21:00 (年中無休)

●インターネットホームページ <http://www.japan-telecom.co.jp/>

浄土

2000/12月号 目次

五重相伝	八木季生	2
表紙・懐かしき玩具	芝崎慶三	9
釈尊のお覺り	真野龍海	10
『法然の哀しみ』感想文大募集		19
学園の現場から	内堀照夫	20
世界はHAIKUを吟う	長谷川裕	26
響流十方	林田康順	34
つば庭日記	近藤啞々砂	38
コラム「浄土宗と浄土真宗」		42
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者増田河郎子	44
マンガで楽しい仏教用語	藤井ひろし	47
編集後記		48



表紙題字＝浄土門主 中村康隆猊下
表紙撮影＝芝崎慶三
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

五重相伝

八木季生

はじめに

浄土宗では、宗祖法然上人の示された教義を後代に正しく伝えたと共に、その教義に基づく信仰の中味を充実させる方法が確立して、それが五重相伝会であり授戒会である。特に五重相伝は、浄土宗の信仰はかくあるべしという形式を伝えるものであるが、浄土宗の五重相伝のすぐれた点は、教師を対象とした方法だけでなく、檀家や信徒を対象とした方法との二通りが準備されていることにある。一つは教師対象の五重伝法であり、もう一つは檀信徒対象の結縁五重相伝（化他五重）である。

五重相伝を受けると

五重伝法は、浄土宗第七代了譽聖阿上人（伝通院開山）が、第八代西譽聖聰上人（増上寺開山）に、五十五個の伝目を定めて明徳四年（一三九三）に伝えたことに始まる。化他五重は、それから更に八十三年後の文明七年（一四七五）に、徳川家康公の六代前の城主、松平親忠が、菩提寺である岡崎の大樹寺開山、聖譽愚底上人から受けたのが始まりである。

結縁五重相伝では、五重に参加することを「五重を受ける」という。そして、五重を受ける人のことを「受者」という。五重を受けると、そこに仏弟子（仏子）が誕生する。

五重の内容

五重の作法は、四、五日間から七日間くらいかけて行われることが多い。その全期間が、

前行の勸誡と正伝法とに分けられる。勸誡とは正伝法に於いて、伝灯師から信仰の火を正しく受けられるように心構えをつくることであり、正伝法とは、五重相伝の最終日に伝灯師から相伝を受けることであつて、要偈道場と密室道場とから成り立っている。

五重の名目みえのなめ

五重の「重」は、重要な重であり、重ねるといふいみの重でもある。五重の構成は、四つの書物と一つの口伝から成り立っていて、それぞれに重要な中味を持ちそれらが重なり合つて五重になっている。それぞれの名前を、五重の名目と呼んでいる。

五つの名目は、初重、二重、三重、四重と呼ばれ、五番目だけは第五重と第の字をつけて呼ばれている。

五つのそれぞれに、伝灯分という伝法を受け伝える法脈と、由来を明らかにする部分、そして正説分として正しく教えを説く部分とがある。

初重 『往生記』 浄土宗祖法然上人作 「機」

念仏信仰の尊さは、落ちこぼれを出さないことにある。老人も子供も、知者も愚者も、金持ちも貧乏人も、あらゆる人を対象にしている。せつかく仏弟子として理想のお浄土を求めても、不資格だとはねられるようなことがあつてはならない。念仏信仰をするのに相應しい人とは、どんな条件を具備していたらいいか、その適否条件が「機」という人柄である。

自己を深く内省した時に、善いと知りつつも実行できず、悪いとわかりながらも止める

ことの出来ない意志の弱い自分であるが、そんな私にも仏さまから頂いた大事な仏性がある。阿弥陀さまのご本願のお力は、この私をもお救いくださる。

この私のような至らぬ者であつてもという謙虚な自己反省、そして自分の全てをお任せできる阿弥陀さまの絶対なる救い、それを信じて念仏を称えることの出来る人柄が要求される。これを愚鈍念仏第一の機という。初重のしめくりとして、巻尾に『一紙小消息』がある。『一枚起請文』とともに、浄土宗の二大法語として親しまれている。

二重 『末代念仏授手印』 二祖聖光上人作 「行」

元祖法然上人が建暦二年（一一二二）一月二十五日に入滅されてから、年を経ると共に、門弟の中からも異説が称えられるようになり、八年間その膝下において念仏信仰の全てを、余すことなく心得ていた二祖が、上人滅後十七年経つて後顧の憂いのないように書かれたものが二重の書物である。

念仏申すについての心の持ちかた（安心）と、目標に向かって行動をおこすこと（起行）、更にはこの両者、安心と起行を策励させる（作業）が満足されていることが肝要である。この三つが浄土宗の教義の「行」の全てで、これが二重に説かれている。

浄土宗の念仏に対する安心は、

至誠心

深心

うそやごまかしのないこと

自分を深く見詰め、その自分をも救っていただけ「法」の存在すること
を深く信じる

回向発願心

極楽の世界に生まれたいと強く願う

という三つの心（三心）を備えることで満足される。

起行としては、専ら南無阿弥陀仏とほとけのみ名を称えることであるが（正定業）、その他にこれを手ける行として四つの助業があつて、それが次の五種正行である。

一、どくし読誦正行 所依として定められた経典を読む

二、かんさつ觀察正行 極楽の世界や極楽においてになる仏さまを拝む

三、礼拝正行 阿弥陀さまを礼拝する

四、さんだん称名正行 一番中心になる行である南無阿弥陀仏と名を称える

五、讚歎供養正行 阿弥陀さまの徳をたたえ、お花やお香を供養する

作業には四修と三種行儀の二つがあるが、四修とは、

一、くきようし恭敬修 うやまい、おがむ生活態度を持つること

二、むよし無余修 念仏以外の余行を交えないこと

三、むけんし無間修 間断なく相続すること

四、じようし長時修 自分の生涯を通じて実践することである。

三種行儀とは、念仏者の生活のあり方に対する三種類の行儀であつて、

一、尋常行儀 毎日の生活の中での念仏

二、別時行儀 特別の日時を限つての念仏

三、臨終行儀 人生の終り、臨終に際しての念仏

これら、安心、起行、作業のすべてが、念仏の一行に帰結するのでこれを結歸一行三昧といい、またこれを奥図の伝とも言っている。

三 重 **『領解末代念仏授手印鈔』** 三祖良忠上人作 「解」

領解とは、了解することであり、はつきりと自分のものになってわかったということである。三祖良忠上人が、二祖聖光上人から授けられた『末代念仏授手印』を読んで、この内容全体が、念仏一行に帰結するという風に受け止めて、二祖がよろこび印可されたもので、これを「解」と伝える。

四 重 **『決答授手印疑問鈔』** 三祖良忠上人作 「証」

千葉県の君津市、周東にいた学僧在阿が、病に冒されて余命に限りあることを知ったとき、『末代念仏授手印』を得て喜んだが数多くの疑問にぶつかかった。

その疑問に答えてくれる人を探して苦勞をした結果、やっとの思いで三祖に出会うことができて、答えを得たのが『決答鈔（決定明答）』である。

五重では八十一の疑問の中から、「念仏を称えようとしているのに、往生をねがう心が弱く、貪りや怒りや愚癡の強く起こるのはどうしてか」という質問に対して、「煩惱は前の世から身についたものであり、道心は今生に初めて起こしたものであるから弱い。二河白道の譬えをよくよく参考にしなさい」と答えられたことを取り上げる。

善導大師が『観経疏』の中で説かれた二河白道の譬えを理解することで、念仏で間違いない極楽に往生の出来ることの証拠を得て確信する。

第五重 (口授心伝) 「信」

第五重には四重までのような書物がない。伝灯師の口から、受者の心へと伝える。その内容は、五重を受けた者のみができることである。

この伝は、中国浄土教の初祖、曇鸞大師の『往生論註』に依って、一念十念の念仏が、よく多年の造罪を消滅させる理由を明らかにして、念仏の功德(凡入報土)を確信させるものであるから、これを「信」と伝える。

また観無量寿經に「声をして絶えざらしめ、十念を具足す」とあって、声が本体であり、十念は十声であるから十遍念仏を申すことを「お十念」と言っているが、十念具足すれば業事成弁(極樂に往生する因ができあがる)する。そのお十念の数をかぞえないで称える勝れた方便がある。それは「必ず口授をまっけて、筆点に題することを得ず」と『往生論註』にあるところから、伝法の作法で口授するのである。

(大本山増上寺布教師会 会長)

懐しき玩具

撮影

芝崎慶三

柄を付けた太鼓の両側に糸や玉や小鈴を結び吊るし、振るとそれが太鼓の面に当たって鳴る。振太鼓、でんでん太鼓、豆太鼓、ぶりぶり太鼓など地方によっていろいろな呼び方がある。舞楽の振太鼓に似せた、古くからの玩具である。

平安朝の「榮華物語」に「今の上(円融帝) わらわにおはしませば、つごもりのつゐなに殿上人ふりつづみなどしてまゐらせたれば、上ふり興ざさせ給ふもをかし」とあるから玩具としての起源は相当に遡ることができる。

※

一年にわたった「懐かしい玩具」いかがだったでしょうか。撮り下ろし、ということで筆者には感慨深い連載となった。感謝。

お釈尊の 覚り

真野龍海

お覚りの日・開戦の日

十二月八日が来ると思いは複雑であります。仏教徒では、釈尊が覚りを悟られたとして、宗派によっては、この日を中心に修行を行います。聖なる日であります。

しかし一九四一年は、日本空軍の真珠湾の奇襲攻撃があり日米開戦の日となりました。日の丸弁当持参で頑張る日ともされましたが、国民の多くは、仏教の聖なる日とは自覚しなかったようです。思えば、その日は日曜日で、キリスト教徒では聖なる日で、仕事は休むとされ、しからざるものは異教徒として非難すべきものとなるわけであります。まさに因縁の日でした。

さて、覚りといいましたが、いったい釈尊は何を悟ったのでしょうか。私は中学校の時ある授業で教師が、何を悟ったかは寺の坊さんにでも聞くんだな、と言ったことが思い出されます。寺の坊さんとなると、仏教ではありますが仏教から分かれて発展したそれぞれの宗派に属していますから、なかなか釈尊の覚りそのものは、説明しにくいというか宗派よりのものになってしまいます。

覚りの事情を伝えるお経——『初転法輪經』

さて、釈尊（五—四世紀前）が涅槃に入つて、アシヨカ王が現れてほぼ全インドを治めるようになりました。王は宗教、仏教、道徳によつて政治を行おうとしたことで有名です。王はインド各地に、その趣旨の文章を磨いた石崖や、直径が一—二メートルもあろうかという石柱に、刻ませて国民に知らせたものが、二千年後の今日でも残っています。その文字はアシヨカ文字として貴重な文化として残されています。

その文章は、家畜に対しても日陰で休ませよとか、具体的な優しい言葉も見えます。その中に、『律の中の最勝のもの』という言葉が残っています。

王は僧侶でない在家といいますが、一般人として仏教を政治に実践したのですから、特に偏った取り上げ方でなく、一般的な、常識的な見方であると感じていいのではないか、と思われまゝす。

しかし、それは、何々經という名前では示されず、また、独立した名前もないのですが、この『律の中の最勝のもの』は、現在の經典では、大藏經の中の律藏という分類の、後の『初転法輪經』と言われている經典のような部分を指すとされています。經名の意味は、釈尊が悟りの中身——法を初めて展開した、法の手輪を転がせた、

説法したという意味です。アシヨカ王は釈尊死後百年頃で、この経の骨格は釈尊の三、四代後の弟子が語り伝えた時代の編集ですから、仏教の骨組みを伝え、内容はかなり信用されていいのではないかと思います。

覚りについて インドの伝統と釈尊の悟り

さて釈尊はすばらしい覚り——仏教を発見されたのですが、不思議なことには、このお経では、説法する事を三回もためらわれた、と伝えていきます。ためらいは迷いであると言われるのに、どうして、ためらわれたのでしょうか。今まで多くの仏教研究者も、この点にあまり、疑問を投げませんでした。つい最近になって一人の方が、この経の「釈尊が、私の悟った所は、……世に逆らい、微妙で……」という文で、注目し論じられたのが目についたくらいです。しかし、何を逆らうかは、一般論で具体的には未だ不明でした。

逆らうのは为什么呢。それは間違いなく釈尊の無我論です。釈尊もインドの思想家であり宗教者なものですから、そんなに逆の事は言われていないはず。一番目だつのは、釈尊はインドでは無我論者ということです。「我」はインド語、サンスクリット（梵語）では、「アートマン」ですが、インドの主流の思想は皆、これを元

として成り立ち、信仰も同様です。

「アートマン」は自我、魂という意味ですから、仏教、釈尊が、無我「アートマン無し」と言えば、「アートマン」(魂) 否定ということになり、既成民族の宗教は否定されることになります。釈尊のいう意味は「アートマン」にこだわるな、「アートマン」という実体は実在しないのだ、無我というより無執着、こだわるな、ということですが、言葉だけでいうと「アートマン」(魂) は認めないととられます。そうなると従来の宗教を否定し、この世で善根功徳を積み来世は天に生まれると信じる事をぶちこわすのではないかと見られます。言葉だけだとそうなります。釈尊はこの無我を説くことが無靈魂、宗教否定と誤解されると悩まれたのです。

人を見て法を説こう

しかし、この経では、梵天というインド最高神が釈尊に法を説くようにと三度も懇請に現れます。それは、釈尊の心の内の動揺、苦悩を表現したものでしょう。三度目に、釈尊は一般社会を考えて見られました。すると、心に垢の多いものと少ないもの、導きやすいものと難しいもの、来世を信ずるもの、等々がいることを思われました。

例えば、池に青、赤、白の蓮が、それぞれ、まだ水中に沈むもの、水中に伸び、水面に出ていて水についていないもの等々、を思い合わされました。人間も、煩惱の多いもの、優れたもの、劣ったもの、来世を信するもの等々様々である、と観察されました。

そこで、釈尊は人を見て法を説く事に気がつき、梵天に、「実は人を迷わすといけないと思って説法をためらった」と言って、今後、蓮の色々あるように、相手のそれぞれにふさわしい説き方で説法をしようという意向を伝えられました。今でいう「人を見て法を説け」という方便という事です。

さて、それから、悟られた法を、次々と説法、即ち、法輪を転じて行かれるのですが、まず初めに、インド教の旧師、二人を尋ねられるのですが、亡くなっていました。そこで、釈尊が修行に入山以來ついていたが、釈尊の下山後、別れてしまった旧部下の五人を尋ねて説法しました。

この説法の内容と順序に注目したいと思います。

説法の順序

A 比丘達へ――中道・八聖道・四諦・無我・無常

①中道 極端な偏見を離れてとらわれないこと。

②八聖道 正見・正思・正語・正業（行為）・正命（生活）・正

精進・正念・正定（精神集中）

③四諦 1. すべて（生・老・病・死）は苦であると諦める

（明らかに見る）

2. その原因は人（社会・国家等）の生存欲（集）であると諦める。

3. これらの苦をもたらす欲を滅し離れ諦める。

4. その滅のための実行（道）を行う事を諦める。

④無我―（色（物質）・受（感覚）・想（概念）・行（意識）は

無我）

⑤無常（同）

概略このように説法したわけですが、注目すべきは、肝心の無我は説法のほとんど最後に来ていることです。

やはり、無我は最初に説くことは、仏教の本質が分からないと、無神論、靈魂否定論と誤解されることをおそれていることが分かります。

人を見て法を説く仏教の融通性というか大衆性が見て取れる説法順が分かるようです。この無我を後の方で説くことに、仏教界ではあまり注目する人はありませんでしたが、先般亡くなった中村元先

生は疑問を呈しておられました。

B 一般信者へ——来世・上天——往生

さらに、釈尊は在家の人には、布施や戒等でこの世で善根功徳を積んで来世を願うこと——上天等をお説きになり、さらに、心が明らかになれば、本来の教えも説かれました。このことは今の仏教でいうと念仏往生の教えに当たります。また、最初の四諦等は坐禪諦観の仏教になります。

このように『初転法輪経』は釈尊のA聖道——出家・B信者——上天往生という仏教の二面のあることを説いています。

『初転法輪経』と現在の仏教

この経は、仏教の經典を分類して、それぞれの宗旨が最も優れている教判という立場からすると、仏教の最初時期（それは貴重なこととありますが）に近いため原始的、未熟な仏教という分類に入れる立場の学問が後世できたので、どちらかというと近代まで重要なものと評価されませんでした。

しかし、『法華経』という大乘仏教を代表する經典は、全くこのお経の説き方で、第二章の「方便品」という章は、まさにこのお経

と同じ方向です。しかし『法華経』の解説や説明には、『初転法輪経』などは、初期仏教経典の阿含という未発達部分に分類する伝統的權威的やり方として見られたので、重要視されませんでした。

このABの二つは、法然上人は『選択本願念仏集』の第一章で、A聖道門、B往生浄土門と道綽禪師のお言葉を引いて明快に説明されています。

(浄土宗教学院理事長)

梅原猛著作集全20巻の第1回配本 『法然の哀しみ』刊行に寄せて 感想文大募集

以前より法然上人に対し高い関心を示され、本誌にもご執筆頂いたこともある日本を代表する哲学者梅原猛氏が、ご自身にとって第2回目の著作集を出されました。そしてその著作集全20巻の第1回配本として、特別に書き下ろされた『法然の哀しみ』（小学館・3,800円＋税）が刊行されました。

本文642頁に渡る膨大な著書で、内容も『醍醐本法然上人伝』への高い評価から、出家にまつわる話や父親像など、従来の宗の定説とは違う説を展開されています。さらに法然上人と善導大師の人間像の比較や、従来法然上人の外護者とされた天台座主慈円の行動など、興味を引く見解がめじろ押しで、お読みになった方はさまざまな感想を持たれたことと思います。

「一般人が読める法然を」と提唱される梅原氏の法然上人に寄せる篤い思いは、誰もが思っていることでありましょう。法然上人を鑽仰する思いの中から、さまざまな見解が示され世間に公表されることは歓迎すべきことと思います。そこで本誌読者の皆さんに、本誌誌上で『法然の哀しみ』に対するさまざまな思いを語って頂きたい、誌面を開放致すことにしました。

2000字くらいまでで『法然の哀しみ』感想文を募集します。どなたでもご投稿下さいますようお願い申し上げます。なお投稿が多い際には編集部にて掲載を選択致しますことをご了承下さい。

合 掌

『法然の哀しみ』感想文

◇原稿枚数 2000字以内

◇投稿期間 2000年12月～2001年3月

随時受付、随時掲載予定。

◇あて先 〒105-0011 港区芝公園4-7-4 明照会館内

法然上人鑽仰会月刊『浄土』編集部

学園の現場から

「不登校」

それ自体はさほど
問題ではない

誘発される二次障害的な状況が問題である

ゆうび小さな学園

代表

内堀照夫

今もときどき、不登校の原因・主因による

「タイプ分け」を問われることがあります。

不登校の子ども達と長年一緒に生活してきた経験でいいますと、原因・主因を探ることやタイプ分けすることに大きな意味付けが期待できなくなっています。

それよりも先入観なしに現在の状態像をあたたく見つめたり、寄り添って活動したりする過程で湧き出てくる対応や支援の方法の方が適切・有効であることを実感しています。そもそも一人一人異なる個性から起きる不登校という現象を「タイプ分け」すること自体誤りではないかとも考えるのです。

この頃の不登校の事例をあげてみます。

■小学校5年生のI君の場合

父、母、姉、I君の四人家族です。

父親の転勤に伴い、四人で海外生活を送りました。期間は三年間でしたが、その地では国情も影響して、家族はむやみに外出することなく、多く家の中で暮らしたということ

でした。言葉を大事にした、仲むつまじい濃密な生活であった、といえます。

4年生の春、帰国。不登校は2学期からはじまりました。I君はその原因についてこう語ってくれました。

ぼくはあまり運動が好きじゃないんです。ゲームもあまりやらないし、カードを集めたりもしない。絵を描いていたりするのが好きなんです。

絵の内容を見せてもらいましたが、この年齢にありがちなマンガのキャラクターの絵などではなく、飼い犬のスケッチや人物、静物画など、彼のオリジナルなものが多いようです。学校の友だちとはどうしても話が合わないし、どっちかっていうと、新聞やテレビのニュースについて、大人とゆっくり話しているほうが好きなんです。

■小学校6年生H君の場合

H君は、あることに興味、関心がわくと場所も時間も忘れて、そのことに夢中になって

します。母親はこう語ります。

小さいときからそうだったんですが、たとえば道路工事のために交通誘導をしているところに出くわしますよね。そうすると、何時間でもそれを見ているんです。興味を示すと動かないんです。そのうち、シグナルライトを買って、とせがみだすんです。

買いとると、今度は自分で車の誘導を試みてみたり、それらしい場面に出会うと、どうしてもやらせて貰わないとおさまりがつきません。

それは交通誘導に限ったことではなくて、どんなことでも自分の気がすむまでは、ほかのことを受け入れられないのです。

そして、こう付け加えました。

45分を単位としてプログラムされている、学校というところには向かない、とつくづく思います。

日君、本人はこう言います。

ぼく、理科の実験が多かったり、社会科見

学の多い学校なら行きたいな。

彼は家電製品の分解・解体を好み、自転車のパンク修理などもお手のものです。学校の社会科見学や修学旅行には参加しています。

■小学校6年R君の場合

R君の場合、競争でやる気をあおり、我慢を強いるような集団に耐えられない、という性格に起因する事例です。

彼はとにかく競い合うということが性に合わないのです。もちろん相手を傷つけるようなことを言ったり、テレビのバラエティ番組などでタレントがやっているのを真似したような、いわゆるブラック・ジョークの類で笑いをとったりすることなどには、嫌悪を感じるばかりで少しも楽しめない、といえます。

ぼく、友だちをつくるのに時間がかかるんだ。だって、友だちになっちゃってしまっから、いやなところが見つかったても、友だちをやめるっていいないでしょ。他人に無理されるのいやだから。自分も他人に無理できないから。

彼は、相手の心根を敏感に感受できるので、だから彼は、小さい子や障害のある子などには、こころよく優しさをもってつきあえるのです。

以上あげた三人の子どもの様子や発言から何が読み取れるでしょう。

彼らはまず学級集団というものと自分との関係をかなり客観的に見つめています。

そして自己抑制してそこに所属しようとしても、どうしても限界を感じる自分を発見します。そういう自分をそのまま受け入れ自己承認しようとする行為、それが結果、不登校となつて現れたのです。不登校は、なかば自分の意志で選択したともいえるのです。

この子たちにとって「不登校」はさほどの問題ではありません。

学校に行こうとして、通学服に着替えランドセルを背負い、玄関まで出て靴を履こうとした時に、嘔吐をもうしたり、腹痛がおきたり、体が固まってしまったりする不登校か

ら、「お母さん、私、来月から学校へ行かないからね」とか「〇〇君が詫げるまでは登校しないから」とか「△△先生の授業はつまらないから休む」とか「週に1〜2日は欠席する」などと言える不登校まで、一人一人異なる不登校の事情があります。

そうした「登校」と「不登校」の間で揺れる個性的な子どもたちの選択が、最近「不登校」に傾いていることは確かです。

むしろ、不登校で課題とされるべきは、それによつて誘発される二次障害的な状態にあるといえます。

子どもたちの声を伝えます。

ぼく、学校に行かないのは悪いことだと思わないようになってきたけど、でもそのことはお母さんを悲しませているのかな。

この間、お母さんがひとりのとき泣いていたんだ。

勉強がおくれるってお母さんがいうんだけど……勉強やらないと、もし学校に行きた

くなつたときも行けないの？

同じ年の友だちは少なくなってきたけど、ゆうびで友だちでできたから、これはまあいいかって思っていたのに。お母さんはもつともつと大勢の友だちのなかに入って行ったらつていうんだ。

ぼくにも身分証明書発行してよ。だれかに電車の中で話しかけられたら「ぼくはゆうびの学園生です」って見せるんだ。

いまはとりあえず自分の好きなことをやって、だんだんと自分のほんとうにやりたいことと見つけていけばそれでいいよね。

「このごろ、ゆうびで元気に動き回っているようだが、そろそろ学校に行けるんじゃないか」ってお父さんに言われたんだ。ぼく、とたんにかたまっちゃった。

両親や周囲の人の言葉や態度に、かすかな不安を感じて揺れている子どもの心のうちがみえてきます。

いまさら、と思われるかもしれませんが、

不登校の子を持つ母親が二次的な障害に迷いこみやすい過程を10段階に分けて辿ってみます。

①なぜ学校に行けないの、と原因を厳しく追求する。

②子どもは母親が納得するような不登校の理由づけができないので

③「幼児返り」をすることで逃避する。なぜなら理屈がいらなから。

④その頃、急に体をすりそせてきたり「一緒のお布団で寝たい」などと言ったり、スキンシップを求めてくる場合も多い。

⑤なんとか登校させたいという親の焦りが、子どもと一緒に登校する・無理やりクルマで学校まで送り届けるなどの行動に駆りたてられる。

⑥子どもは、この時点で「優しかったお母さんが学校の先生と同じ怖い人になってしまった」と思うようになる。この時期に家で暴れ出すこともある。

⑦「私の子育てが間違っていたのでは」と育て方を振り返るようになる。しかし、思い当たったことはあまり、ない。いたずらに自分を責め、傷つけ、自信をなくす。母親失格、と自分で烙印を押し、嘆く。

⑧周りの人たちは「おまえの育て方が悪い、なんとかしなさい」と母親を責める。一方、母親は「ご近所に恥ずかしい」などの思いがこうじてストレスが溜まる。表情から笑顔が消える。結果、家庭は暗く寂しいものとなる。子どもは、それを自分のせいだと思い込み、罪悪感をつのらせる。

⑨相談機関や病院巡りがはじまるのはこの時期である。来院した母と子が熱心に病名を問うため、医師は病名を付ける。処方箋が出て、薬をもらう。

一、二回飲む。なんだか効き目があるような気がする。

⑩母と子はほんとうに「病氣」だったんだ、と思い込む。本当に病気になる。

多少、図式的な筋立てになってしまいました。が、このような事例に向き合うことが大事なことなのです。

こうして、輝く瞳をもった、個性豊かな、元氣いっぱいのが子を、自分と一緒に病気にまで追い詰めてしまうのです。

不登校――

そのこと自体には、本来、大きな問題はないのです。問題は、そのことが続いたときに誘発される二次障害的な状態にあります。

世界の
共有財産と
なりつつある
日本の俳句

長谷川 裕

(著術家・俳人)

世界は
HAIKUを
吟う

いまからちょうど百年前、明治三十三年の春、横浜港に着いた外国船から一人のメキシコ人が埠頭に降り立った。その男の名はホセ・ホアン・タブラダ。メキシコの新聞社の通信員として、地球の反対側にある遠い憧れの地、日本を訪れたモダンイズム派の詩人である。

当時、メキシコ社会は宗主国のスペインからの独立を果たしたものの、フランスの内政干渉、北の巨人、アメリカ合衆国との領土争奪戦の傷はいまだ癒えず、権力をうかがう新興都市ブルジョアジーと、旧莊園を支配する封建勢力、そして地方の貧しい農民たちとの間で階級対立が激化し、社会的緊張は日に日に高まりつつあった。革命前夜の社会不安と暴力、それは星と筆を愛する詩人タブラダにとって関心の埒外、彼が愛したのは「美しいもの」が全てだった。

すでに日本については予備知識があった。当時、メキシコの文壇にはフランスからジャポニズムの情報がふんだんにもたらされていた。江戸末期、輸出された茶箱の裏張りに使われた浮世絵に端を発したジャポニズムは、十九世紀末の印象派の絵画あるいはアール・ヌーボーの工芸等に大きな影響を与えており、大西洋

經由でそれを聞き知ったタブラダは、かのエキゾチックな東洋の島国、夢の国日本に大いなる期待を抱き、はるばる大平洋航路の客となったのであった。

タブラダはその日本滞在の印象を『太陽の国にて』という紀行文一冊に纏めている。当時の新橋駅での印象が面白い。タブラダは新橋駅の待合室（もちろん関東大震災で崩壊するまえの新橋駅である）には、カリ、コロリとそこいらじゅうに下駄の音が鳴っていた、そのエキゾチックな響きを驚きながら記している。もし、現代の私たちが当時の新橋駅を訪れたならば、タブラダと同じように、駅の建物いっぱい響く音楽のような不思議な下駄の音に圧倒されたことであろう。

タブラダは横浜、東京をはじめ、京都、奈良など日本各地を訪れたものの、その日本滞在は長くは続かなかった。タブラダが直面した、性急に西欧文明を吸収するなかで、ときおり珍妙でグロテスクな姿を露呈しつつ、東洋の新興国家として邁進する現実の日本の姿はこの時代の西欧人なら例外なく憧れたであろう「花魁」や「浮世絵」に彩られた、エキゾチシズムに

溢れる理想郷日本とは、おそらく相当の乖離があったはずだ。そして彼がそれに幻滅したであろうことは想像に難くない。

しかし、彼は日本から帰国するさいに大きな土産を持ち帰っている。それは俳句であった。タブラダは、メキシコに帰国後の1919年に『ある一日』という詩集を上梓している。そこには、彼の発句が数多く綴られている。そのうちの数句をここに紹介しよう。

[La Luna]

[月]

Es mar la noche negra: 黒い夜は海
La nube es una concha, 雲は貝
La luna es una perla.... 月は真珠

[El Saúz]

[柳]

Tierno saúz 柳若葉
casi cro, casi ambar, まるで金 まるで琥珀
casi luz.... まるで光

[El Bambú]

Cohete de larga vara
El bambú apenas sube se dobléga
En lluvia de menudas esmeraldas.

[竹]

長い枝の花火
竹は昇り折れる
細かなエメラルドの雨

なんと甘ったるい星董派の面目躍如などというのは、八十年後の今日からする皮肉にすぎぬ。それまでこれでもか、これでもかとはかりに抒情、叙事のくどくどしい説明を展開する、欧米の長いフレーズの詩に慣れ親しんできたタブラダが、五、七、五という限られたきわめて短い言葉のなかで一氣に世界を詠みこもうとする、清新な俳句のありように驚き、かつ子供

のように懸命に「HAIKAI」を我がものにしようとしているその姿に打たれずにはいられない。

タブラダの「HAIKAI」は、メキシコの詩壇にも影響をもたらしたようで、その後、1920年代、メキシコではまったく当の日本に知られることなく、俳句ブームが訪れ、何人かの詩人が発句をおこなったという。その後、メキシコのHAIKAIブームは終焉するが、その俳句に対する関心は消え去ることなく現代にも引き継がれ、かのノーベル賞作家、オクタビオ・パスは、芭蕉の『奥の細道』の翻訳を手がけていたりする。

俳句に魅せられた外国人は、タブラダだけではなく。実は、俳句はタブラダが日本に上陸するずっと以前から、すでに欧米に紹介されていた。東洋の島国、日本に「俳句」というきわめて短い、不思議な短詩があるということは、タブラダに先駆けて、すでに英国人のバジル・ホール・チェンバレンらによって欧米に伝えられている。チェンバレンは明治六年（一八七三年）に來日、明治十九年に東京帝国大学で英語教師の任に着き、日本の古典文学を深く研究した初期のジャ

パノロジストである。チェンバレンは彼の著書「口語日本語ハンドブック」のなかで、日本人なら誰でも知っているであろう千代尼の句「朝顔に釣瓶とられて貰ひ水」を紹介している。

日本の俳句を西欧世界に紹介したのは、チェンバレンだけではない。同じく東京帝国大学で教鞭を取った、ドイツ文学者、カール・フロレーンツはアンソロジー詩集、『東方よりの詩人の挨拶』のなかで日本の短歌、俳句を翻訳し、ドイツ語圏にそれを伝えている。さらに日本人なら誰でも馴染みの深い『怪談』の作者ラフカディオ・ハーンは、チェンバレンとも親交が深く、彼のさまざまな仕事のなかで折りに触れて日本の俳句を翻訳しているが、彼が芭蕉の「古池や」の句を初めて翻訳し、海外に紹介した外国人であることは、日本では意外と知られていない。

タブラダが日本を訪れたときには、すでに俳句は、世界中のあちこちにその種を蒔きつつあったのだ。おそらくタブラダは日本に上陸するまえから日本に「HAIKAI」というものが存在することを、予備知識として持っていたと思われる。

HAIKAIなる不思議な短詩型に魅かれた欧米の詩人たちが、自ら発句を試みるようになるのは時間の問題だった。1904年にはフランスのポール・ルイ・クーシューは、欧米人の手になる最初のHAIKAI詩集『河の流れに沿って』を上梓し、それから十年後の1913年、アメリカのイマジスト派詩人、エズラ・パウンドは、日本の俳諧にインスピレーションを受けたHAIKAI詩集『地下鉄の駅にて』を上梓している。タブラダの『ある一日』も、そうした世界的な広がりを持ちつつ、しかし、ほとんど誰にも知られることのなかった俳句ブームのなかで生まれてきた、句集のひとつに数えることができる。

こうして海外の地にも根づいた俳句は、その後、何度かの流行り、すたりを経過しながら、確実に世界に広がっていった。第二次世界大戦を経た現在、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツをはじめ、世界のさまざまな国々で、それぞれに俳句協会が誕生し、それぞれのひとびとが、それぞれの言語で俳句にいらしている。いや、現在、俳句を作っているのはヨーロッパだけではない、中国、韓国をはじめとしたアジア諸

国、オーストラリア、ニュージーランド等、オセアニア諸国、さらにメキシコ、ブラジルをはじめとした中南米、さらにアフリカ諸国にまで広がり、いまや俳句は世界中のありとあらゆる言語で作られている。そしていままでになく豊穡な世界を獲得しつつある。

たとえば、一昨年、西アフリカ、セネガルの日本大使館が現地でおこなった俳句コンテストの応募作にこんな句がある。

Sur un lac fleuri,

花咲く池の中

Ondule, comme un ver,

みみずのように揺れる

L'ombre d'un homme.

人の影

デニス・ゴミスという俳人の句だ。「花」といえば、日本の俳句では春の桜を意味する約束ごとだが、この花はもちろん桜ではない。こうほね、睡蓮等々、水辺に浮かぶ鮮やかな色彩の熱帯の水生植物であろう。国の北東にサハラ砂漠を背負うセネガルにとって、豊か

な水をたたえた水辺は、何物にもかえがたい安息の地。
その原色の花々を咲かせる水面に、人の影がみみずの
ように揺れる。もちろん黒い人々の影。なんと強烈な
色彩感だろうか。

ゴミス氏がいったいどんな詩人かは、ここからはま
ったく知りようもないが、極東の地を遠く離れたセネ
ガルに生きる一俳人の眼に写った光景は、私たちの目
の前に確実にひろがってくる。

Un flamboyant pourpre
perce le paysage nu
et m'enveloppe d'espoir.

炎の赤紫が
裸の景色を貫き
私を希望で包み込む

グニランという俳人の作。空と大地の他に何もない
静かな砂漠の日の出。ただ強烈な朝焼けの原色だけが、
あたりの砂や岩を包み込み、溶かし、壮大な色彩ショ
ウを始める。しだいに昇っていく太陽。気の遠くなる
ような過去から延々とつづいてきた、新しい一日がま

た始まる。そしてそこに力強く生きる私。たった三行
で、広大な光景とそこに生きる人間を詠んだ、日本で
は想像しがたいスケールの俳句だ。

遠く離れたアフリカの地で、こうした俳句が詠まれ
ているとは、なんとという驚き。いや、いまや世界中に
俳人が生まれ、世界中で俳句が詠まれていることに気
づいていないのは、私たち「本家本元」の日本だけな
のかもしれない。

こうした状況を受けて、今年の九月、旧ユーゴスラ
ヴィア連邦の西端にあるスロベニアの首都、トルミン
に世界の俳人が一同に集い、国際俳句協会が設立され
た。ちなみに長らく血で血を洗う内戦をくりかえし、
国家が四分五裂した旧ユーゴスラヴィアでは、クロア
チア、スロベニア、ボスニアなどで、かつての傷を癒
すように現在、俳句が盛んに作られている。

創立にあたった主要メンバーは、日本から俳誌『吟
遊』を主宰する、いま日本でもっとも先鋭的な俳人の
夏石番矢氏。アメリカからアメリカ俳句協会機関紙
『フロッグポンド』の編集者、俳人のジム・ケイシャ

ン氏。スロベニアからは旧ユーゴスラヴィアの『俳句新聞』発行責任者で、南西ヨーロッパでの俳句運動を切り開いてきた俳人、ディミタール・アナキエフ氏。さらにフランスから『日本大歳時記』全五巻のフランス語訳を刊行し、ブルターニュ語で多くの句集を上梓している俳人のアラン・ケルヴェルヌ氏等々、錚々たる俳人、詩人たちであった。

現在、世界俳句協会では、世界中の俳句を集めたアンソロジーの刊行、世界俳句史の編纂、世界俳句歳時記の刊行を計画しており、精力的にその活動を広げつつある。

ここで世界俳句協会の創立にさきがけて、夏石番矢氏が編纂し、吟遊社から発行された、世界の俳句を集めたアンソロジー『多言語版・吟遊俳句2000』から、世界の俳句をいくつか紹介しよう。

●アラン・ケルヴェルヌ（フランス）

Où finit l'océan?

どこで大洋が果てるのか

Où commence
Ma nuit?

どこで始まるのか
私の夜

（夏石番矢訳）

●デイヴィッド・コブ（イギリス）

a moment between
lighthouse flashes-
cold smell of fish

灯台の閃光と閃光
のあいだ
魚の冷たい匂い

（夏石番矢訳）

●ウラディミール・デヴィデ（クロアチア）

Out of the haze
emerge some people
exhaling haze

もやから
何人が現れる
もやを吐きつつ

（夏石番矢訳）

●リディーア・ローズ・ムース（アメリカ）

snow storm

吹雪

all graves

墓石は皆

nameless

無名

(夏石番矢訳)

●リー・ガーガ (アメリカ)

spring mud-

春の泥

a row of young soldiers

柩に入った

in the coffins

若い兵士の 一列

(夏石番矢訳)

俳句は日本語でわずか十七文字というごくかぎられた短い型式を持つことが、ひとつの約束でありながら、同時にそれが逆に世界性を獲得する大きな要因となった。短いがゆえに誰にでも書けるのが俳句である。これまで詩はごく一部のインテリや文化人など、社会のなかで経済的、知的優位に立つ人々だけに許された特権であったが、俳句はそれをごく普通のひとびとのも

のへと解放した。

もちろん詩が大衆化することで、その内実を希薄にさせ、つまらない詩が溢れだすことは否めない。しかし、世界中どんな民族、文明でも、その中心にあるのは詩である。文明の衰退は詩の衰退から始まるといわれる。世界中のごく普通の人々が、ごく当たり前のように詩を作るようになることは、これまで国境や言語によって隔たれ、戦争と革命をくりかえし、血と涙を流しつづけてきた二十世紀から訣別し、二十一世紀の新しい世界を展望することにもつながるのではなからうか。

もはや俳句が日本人だけの、特殊な文芸であった時代は終わった。世界中の人々が、HAIKUという詩の様式を共有することで生まれてくるものはいったいなんだろう。きっと地球は俳句という、自らを荘厳する詩型を首を長くして待っていたに違いない。

参考文献——『多言語版・吟遊俳句2000』(吟遊社刊)／『第10回企画展図録・世界の俳句がやってくる』(群馬県立土屋文明記念館刊)

阿弥陀仏は、一念とのうるに一度の往生にあてがいておこし給える本願なり。かるがゆえに十念は十度うまるる功德なり。一向専修の念仏者になる日よりして、臨終の時にいたるまで申したる一期の念仏をとりあつめて、一度の往生はかならずする事なり。

（『禪勝房にしめす御詞』）

阿弥陀さまは、わずか一遍、お念仏を称えれば、その中に一度の往生が叶う功德を込めて本願をおたてになりました。ですから、十遍お念仏を称えれば十回の往生が叶うほどの功德があるのです。それほど貴いお念仏であることを心得て、ひたすらお念仏を称える身となったその日から、命尽きるその時まで称えた一生涯にわたるお念仏の功德をとり集め、ただ一度の往生を必ず遂げるのです。

「たった一度の〈この私〉の往生」

去る九月十二日、私は京都までたどりつけませんでした。

世界広しといえども、わが国の電車の運行ほど時間に正確なものはありません。中でも、昭和三十九年に開業した東海道新幹線は、その正確さで有名でした。ところが、その新幹線が、東海地区を襲った大雨の影響で丸一日近い遅れを出してしまったのです。浄土宗のある大会で京都に向かう予定だった私も、東京駅で足止めをくい、予約した切符を変更し、結局十三日に行くはめになりました。翌朝、新幹線の車中から見下ろした、車のボンネットまで水に浸かった名古屋駅周辺のありさまが私の心に鮮明に焼き付いています。いったい誰が、そうした事態を予測し得たことでしょうか。

大雨の襲来や新幹線の遅れ以上に、「たった一度の〈この私〉の死」の訪れは、どんな人にとっても予測不可能なことです。それこそ諸行無常の世の中ですから、私たちを取り巻く環境も、私たちの身や心のありさまも時々刻々移り変わって行くのです。そうしたあたり前の現実を十二分にご存じだったからこそ、法然上人は「ただ

一向に念仏すべし」と、未来のある一点に必ず訪れる「たった一度の〈この私〉の死」を迎えるその瞬間まで願往生の心と本願念仏を手放さないようにと訴えられたのです。

ところが、自力の教えを奉ずる方々ばかりか、法然上人の教えを受けたはずの親鸞聖人の真宗や一遍上人の時宗でさえも「ただ一遍のお念仏を称えた時点で既に往生は決定している」「阿弥陀さまが悟りを開かれた時点で既に往生は決定している」などと、どこまでも「死」を理念的・観念的に、いつてみれば未来の「死」を先取りした現在完了・過去完了で語っています。そして、あげくのはてには「臨終の時までお念仏を称え続けなければいけないという浄土宗の教えは、阿弥陀さまの本願のお力を疑っているもので、自力の思いが抜けきれない不徹底な教えだ！」などと法然上人の教えに非難を加える始末です。なるほど、こうした理念的・観念的な言い回しは、バーチャルリアリティー（仮想現実）の世界にどっぷりつかり、複雑な現実世界や人間のありさまを上っ面だけでしか捉えられず、

ましてや、「たった一度の〈この私〉の死」を正面から見ようともしない自称知識人たちにうってつけなのかも知れません。

けれども、「わずか一遍のお念仏でも往生が叶う」と教えて下さったのは他ならぬ法然上人であって、その上人が阿弥陀さまの本願のお力を疑うはずありません。疑うべきは、決して阿弥陀さまの側ではなく、時々刻々移ろいゆくこの現実世界に生き、それに応じて揺れ動く心を具えた私たち人間の側にこそあるのです。法然上人にとって、今を生きる「〈この私〉の死」は、決して理念的・観念的なものではなく、未来の一点を見据えた真剣勝負の場に他ならないのです。だからこそ法然上人は、「たった一度の〈この私〉の死」にあたり「たった一度の〈この私〉の往生」が必ずや遂げられるようにと、冒頭のご法語をお残し下さったのです。

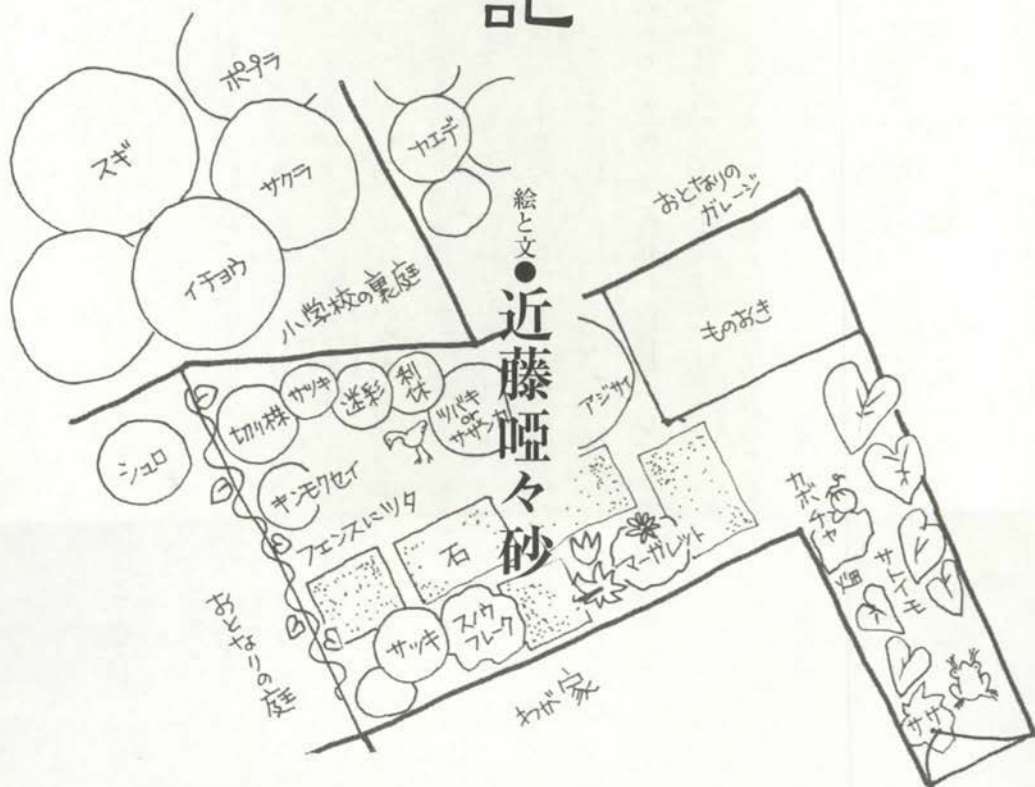
それはちょうど「あの新幹線が大幅に遅れることなどなからう」と高を括っていた私を厳しく戒められるように…。

合掌

(大正大学講師 林田康順)

【展覧会の絵】

つぼ庭日記



絵と文 ● 近藤啞々砂

朝、夫と息子を送り出し、食卓の皿小鉢を片付けると、昨日下描きした絵を置く。公募展に出す為の絵を今日こそは仕上げなくてはならない。搬入締切りは明日。しくじっても描き直す時間はない。

半月前、出展の申込みをした。サイズの欄に迷わず「F 8号」と記入する。ウチには額縁はひとつしかないのである。木製に金を塗った枠で下地に赤を塗ったのが光り具合でわかる。今、額に入っているのはジャワ土産の壺が二つ並んだ絵で、昨年同じ公募展に出した小さい賞をもらった。並んだ壺の一方は黒地に赤い唐草文様の漆器。もう一方は素焼きで蓋の中央にカエルが相撲をとっている。額縁は、この絵に合わせて買ったのだが、今年もこの額に合わせて絵を描く。インチキと頭の半分で思いながら、こういう決定の仕方もありなのだ、と自分に言い置きさせる。タイトルの欄に「バリ夜想」と書き、何を描くかは後で考えることにした。

あれから半月、「まだ描かないの？」と不思議がる夫には「追いつめられると不思議な力が湧く」と、もつともらしい言い訳を述べてある。タイトルと額縁を睨みながら一晩考えてバリ島で何度か観たレゴンダンスの踊り子を描くと決めた。絵の下塗りをしながら、もう二、三日前から始めればよかったかと思う。夏休みの宿題を思い出す。八月三十一日、小学生の私は半ペソをかきながら、ひたすら宿題を片付けている。手のかかる大物ばかりが残っていて、とても終りそうにない。時々心配そうに家族の誰かが覗いてゆく。嵩ばるダンボールを切ったり貼ったりしながら、ふいに「工作と手芸だけは三十一日に残さない」と反省している昨年の自分を思い出す。

始めてバリ島に行ったのは十年前の二月だった。常夏の島への旅仕度。真冬に夏服をひっぱり出し、夏の暑さを思い出そうとするが、着ぶくれた体にその感覚は戻ってこなかった。真夏の暑さを体は忘れていた。もう何十回と

なく夏を過ごしてきたのに。

四人の子持ちのMさんは「忘れなきややつてられないこともあるのよ。」と言った。「もう産まない。と思ったのについ忘れてまた産んじゃうのよ。産んでも産んでも同じ顔で……」絵を描きながらバリ島のことを思い出そうとする。バリの写真や絵ハガキ、本を並べる。昨日描いた下絵をじつとみる。衣装と花冠をつけた少女が、右手に扇を持ち、左手の指を反らせて踊りのポーズをとっている。ガムラン音楽のテープをかける。きらびやかな金属音が複雑なリズムを刻む。意識を眉間に集中して、エンピツ描きの絵の少女を絵筆で踊らせてゆく。しなやかな体を左右に揺らし、反らせた指は小刻に震える。金箔を貼った衣装は照り輝き、金色の冠についた宝石が光を返す。金冠の上にうずたかく飾った花かんざしの、その無数の花のひとつひとつが儚く揺れている。少女の大きく見開いた目は力強い。

次に背景を想う。闇。バリの夜は闇が深い。



その漆黒の闇の中に魔物が息をひそめ、獣が低く啼き、土や草木の臭いが漂う。絵の具を何度も塗り重ね、踊り子を闇に沈める。アセチレン・ランプに照らされた部分だけを残して。ガムランのリズムがうねりを増し、キラキラと舞っていた金砂子が一瞬、炎に煽られたように吹き上がる。そうだ、もっと金色を強く塗ろう。

「いーしやあきイモー」とのんびりした売り声がして、絵の世界から現実に戻された。「イモー」の部分に小節をきかせるいつもの焼き芋屋の声。そろそろ息子が帰ってくる。描きかけの絵を片付けて夕食の支度をする。金色は夜中に塗ろう。

息子を寝かせつけ、再び絵を描く。金を溶き、袖の花柄文様を描き、扇にも金を置く。鎧のような胴飾りに厚めの金を塗り、透し細工の文様を墨で調子をつけながら浮き上がらせる。失敗しても描きなおす時間はない。このヒヤヒヤした感じが楽しくもある。金冠も

厚めに塗り、金細工をし宝石を散りばめた。エンピツ描きだった踊り子は、やっと今、金色の衣装を身につけた。仕上げにバックに金砂子を降りかける。もう朝だ。

額縁に入れてみる。踊り子の表情がイマイチだ。出展したくないな、とちよつと思う。頭の隅から「恥をかくのも勉強のうち」と父の声が聞こえてくる。近寄ったり離れたたりしながら絵の調子をみていると、夫が帰ってきた。少し酔っている。「お、仕上ったの？」と絵を覗く。「お土産絵画になっちゃった。なんか芸術からはほど遠い。こういう絵、パリの土産物屋の奥の薄暗い壁に売れ残ってたよね。金ピカの。」と私。夫はこういう時、間違っても「うん」と言っただけのことを知っている。ただ笑っている。「五十万ルピアで買わないか？」夫は手で「やめとく」と言う。「敷物もつけるよ、ほれ、このカゴもつけて五十万……」まあいいさ、身内に売れても仕方ないのである。

浄土宗と浄土真宗

わかりやすい
法然上人御法語解説

月刊「浄土」好評連載がついに一冊に！

差出人は法然さん

仏教徒の一般在家の方が持つ念珠が、はつきりと他宗と違うのはむしろ浄土宗です。

今まではだいたいの浄土真宗が他宗と違うことが多かったのですが、浄土真宗で使われている念珠は、いわゆる大寺院の参道のお土産屋さんなどで売られている念珠と共通する点が多く、一般的といえるでしょう。

浄土真宗の門徒が持つ念珠は、いわゆる一輪の片手念珠が主流で、敢えて言えば、房がひも状のものが正式です。また念珠は

あくまでも礼拝のときの持ち物ということ、使って何かをする道具ではないようで、礼拝のときは、東西両派とも合掌の手の四本指をくるむ形で房を下にしてかけてお参りします。

浄土宗では一般的に常時持つ念珠は、二連の念珠と決まっています。念珠屋さんなどに行くと、三萬遍、六萬遍などという名称がついているように、お念仏を唱えながら念珠をたぐり、数を数える計算機の働きをしているのです。

その8 念珠

これは法然上人の弟子で、陰陽師であった阿波介の考案した念珠といわれ、それぞれ珠の数で、三万回、六万回数えられるようになっているからです。

法然上人が一日六万遍、お念仏を唱えていたことに由来するもので、浄土宗の信者は日課念仏という言葉があるように、毎日何回かご自身で念仏する回数を決めてお念仏を唱える決まりがありますので、この念珠で数を数えて、日々の精進にしているのです。

(つづく)



袖山榮輝
林田康順
小村正孝

法然上人鑽仰会・刊
定価600円(内税)

お申し込みは
法然上人鑽仰会
〒105-0011
東京都港区芝公園4-7-4
明照会館
Tel : 03-3578-6947



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

会句上誌浄土

●野菊

〔特選〕

荒磯の風に雄々しき野菊かな

河合富美枝

潮風の強い土地の植物は、当然種類も限られる。野草では野菊のほかにはつわぶきがその代表だろう。雄々しくというのは、風に耐えて太々とするのでなく、むしろ細いながらけなげにもと解するに近いものだろう。

〔佳作〕

休耕の荒れたる田圃野菊咲く

大西 明子

野菊咲く畦道犬とかけてゆく

谷 しげ子

人の死を知らず野菊の径遠し

増田 信子

●夜長

〔特選〕

さつきから童謡ばかり夜の長き

栗田 勇作

子供と一緒に童謡を歌う。一つ歌い終わるとまた別のが続いて切りがない。もうそろそろ寝させねばならないのに、なかなか承知し

選者=増田河郎子

〈特選〉

大根を蒔きたる後の雨はげし

浦田 ちゑ

●自由題

〈佳作〉

てくれない。もう親のほうがいよいよ加減眠く
なってきたいるのかも知れない。

佐藤 雅子

長き夜の妻の寢言に続きあり

石原 新

書を伏せてコーヒーを漉す夜長かな

長尾 子浪

〈佳作〉

天気予報では雨がありそうだったので、
せっかく大根を蒔いたのだが、予報は見事に
外れて、大雨になってしまったのだ。蒔いた
種は流れていつてしまわないだろうか。雨が
やむまでやきもきのしどおしである。

絵手紙の魚の目動く秋ともし

大村 和代

工事場の赤旗が掃く秋の風

島谷ときを

露時雨草に沈める流人墓

細田 初枝

野菊

暮参り野菊一輪供えけり
野菊咲く啄木の丘暮れ泥む
野仏に不揃う野菊として去り
一輪を一途に生きてゆく野菊
臥して咲く野菊に夕陽沈みゆく
野菊摘むかの日の友の今いづく
亡き母の齢をはるかに野菊道
潮騒や崖の小途に野菊咲く
小虫群れ野菊の紺をめぐりをり
落つる陽のやわやわと這ひ畦野菊
石仏やそつとふれてし野菊なり
墓経や僧の足元野菊咲き
夕影や野菊は野菊の中に暮れ

大村和代
井村善也
浜口佳春
大場清
細田初枝
片桐てい女
山本美代子
中島一子
金谷友江
佐藤雅子
中島富士子
山本のり子
長尾子浪

夜長

長き夜の妻の寝言に続きあり
漁火の消えることなき夜長かな
長き夜の古老の語り種つきぬ
晩学の夫婦夜長の灯を分つ
その昔夜長の立川文庫かな
補聴器をはずし夜長の文庫本
秋灯火クイズ解く夜の長きかな
ポット吹く夜長の読書いづくす
身の充電にと良き本探す夜長かな
三味線の二の糸ゆるぶ夜長かな
母癒えて夜長うれしき部屋あかり
紅茶入れアルバム掲げし夜長かな
自由題

石原新
加藤政男
大場清
細田初枝
片桐てい女
山本美代子
中島一子
上野明達
金谷友江
河合富美枝
中島富士子
山本のり子
山田瑞邦
山田玲子
片桐てい女
山本美代子
中島一子
上野明達
金谷友江
河合富美枝
佐藤雅子
中島富士子
山本のり子
長尾子浪

浄土誌上句会のお知らせ

季節

春水

芥菜

自由題

締切・十二月二十日

発表・『浄土』二、三月合併号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

うつりゆくときを忘れずまんじゅげ
故里のメロン届きぬ母の忌に
さはやかに芝翫自在の振り鼓
大正生まれのつづく名簿や吾亦紅
父母が振り祖父父母も享年七五三
コスモスのよせる波間に車椅子
夜の雨に熱さず落ちし柿あまた
母の忌や舌に覚えの穴子鮎
子ら駆けて籬に風あり犬子草
くすれ仏月に包まれ冷まじき
義母臥せし遠く聞ゆる秋祭り
観光客乗せておとなし肥ゆる馬

「ごしやうだいじ」の後生は後に生まれる所、つまり来世のことで、浄土宗では極楽浄土を意味します。

時々、「後生だから」と言ってお願いや許しを得ることがありますが、それは大切な来世までお預けしますから、といった意味深い言葉なのです。

ところで、後生自体を信じないと今の世を勝手気ままに過ごすことにもなりかねません。皆さん、後生は本当に大事にして下さいね。



編集後記

世紀末多事争論の暮れはやし 岱潤

いよいよ二十世紀も残り一か月となった。この百年を振り返る企画も佳境に入った感がある。

そしてこの一年もまた二十世紀が集約した形で現れたのか、衝撃的事件が続いた。原子力潜水艦の事故、民族紛争、そして凶悪化する少年犯罪と、まさに戦争と物の世紀といわれる二十世紀の特色が現れているかのようだ。

山口県仙崎を訪ねた。仙崎は童謡詩人金子みすゞのふるさとだ。駅構内をはじめ町中いたるところに金子みすゞの詩が掲げられ、町全体がやさしい雰

囲気に包まれていた。仙崎は漁師とかまばこの町から、金子みすゞの町にすっかり変貌していた。

一人の人間がブームを起こすと、町さえも変えてしまうことに驚きを感じた。「大海も一滴の水滴から」という言葉があるが、共感を得る運動は大きな力になることを見せてくれている。

十二月人権週間が始まるが、二十一世紀は人権の世紀ともいわれている。今こそ金子みすゞの言葉「みんなちがつて、みんないい」を声高に叫びたい。何かが起こることを期待して。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
村田洋一

佐山哲郎
岡川彰道

編集顧問

大室了晴

浄土 六十六巻十二月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十二年十二月二十日
発行 平成十二年十二月一日

発行人 真野龍海

編集人 宮林昭彦

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三)五七八・六九四七

FAX 〇三(三)五七八・七〇三六
振替 〇〇一八・〇八・八二八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷注意



落物注意、静かに



落物注意



道路工事



落物注意



落物注意

安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



禁煙



落物注意



安全第一



児童注意



落物注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

遊・食・憩を楽しむ、東京ベイのブライトン。

浦安ブライトンホテル



施設ご案内

- 客室185室
- レストラン・バー7店
- バンケットルーム4室
- 結婚式場
- チャペル
- リフレッシュクラブ
- エステティック
- 室内プール

〒279-0011 千葉県浦安市美浜1-9
(JR京葉線・武蔵野線「新浦安」駅直結)

Tel.047-355-7777(代)

■宿泊予約係

Tel.047-380-6666(直通)

○東京ディズニーランドへはJRで1駅、3分です。

御所の西、古都の町屋に佇む京のブライトン。

京都ブライトンホテル



施設ご案内

- 客室183室
- レストラン・バー6店
- バンケットルーム4室
- 結婚式場
- チャペル
- 屋外プール

〒602-8071 京都府京都市上京区新町通中立売(御所西)

Tel.075-441-4411(代)

■京都ブライトンホテル東京営業所

〒279-0011 千葉県浦安市美浜1-9

Tel.047-350-5005

一人一人のお客様に、心からのくつろぎを。ブライトンホテルズ。



BRIGHTON
HOTELS

ブライトンホテルズホームページ
<http://www.brightonhotels.co.jp>

ブライトンホテルズグループホテル



京都ブライトンホテル 浦安ブライトンホテル 蓼科ブライトン倶楽部 ホテルブライトンシティ山科